

産業能率大学大学院 総合マネジメント研究科 経営管理コース<MBA>

修了生の声 [認定登録 医療経営コンサルタント]



2020年度入学
三村 和正 氏

<背景>

わたしは医療機器メーカーでマーケティングやトレーニング事業に“のほほん”と籍を置いてきた協会会員である。そんな私が、幸運にも当協会が推進する大学院連携の第一期修了生（MBA）となった。ここでは、なぜ私が大学院に進む道を選択できたのかについて掻い摘んでお伝えしたい。

<内容の保証>

肝心の講義内容の話しから始めてみたい。産能大学大学院は、組織学系を得意とするため、チーム医療を意識した病院組織からの参加者がみられ、また数多く修了生も輩出しているためネットワークの力は強い。中には新幹線で代官山まで通う社会人学生の姿も見られ、同じ境遇の院生として大いに触発された。

<大学院に入る前の逡巡>

人口に膾炙（かいしゃ）するMBAの教育課程を経験することは魅力的に映り、また自らの専門を洗練する過程として、修士論文をまとめることにも興味があった。さりとて、50を過ぎた者がそれを取って一体どうしようというのか？或いは、入学金などの経済的な収支をどう考えるのか？さらには、仕事をしながら大学院に費やす時間をどうやって捻出するのか？といった自分自身に向けた三つの問いが存在したため、大学院に申込書を提出するにあたり、この問いに対して自分なりの解を出す必要があった。

<意思決定に至る自分なりの解>

なかば常識化したことであるが、今まさに人類は長寿社会に突入しており、第四次産業革命の襲来、知識社会・創造社会の到来に代表される労働者キャリア時代の要請による新しい生き方の必要性を指摘している。ある経済学者によると寿命が10年延びる毎に、引退後の生活費を確保するために7年長く働く必要があるというのである！確かに人生100年と言われる今の世の中では、キャリアプランを誤ると大きな陥穽が待ち受けている。そうであるならば、顧客にとって価値ある学び直しを通して、自らのバージョンアップが必要であろうと思ひ、今からでも遅すぎることはないという考えに至った。

続いて、費用調達についてである。産能大学大学院の入学費用・授業料は「良心的」かつ「誠実な」価格設定であり、厚生労働省が所掌する「教育訓練給付制度」などを利用することによって、かなりの割合が支援されたため自己負担は軽減された。最後の関門が時間捻出であった。産能大学大学院は社会人を対象にした大学院であるため、「卒業生の声」などで自分と境遇が似通った人たちが修了していることや、シラバスを調べてみると夏季集中講座や週末だけでもかなりの単位数を取得できることを知った。

【次項へ続く】

産業能率大学大学院

総合マネジメント研究科 経営管理コース〈MBA〉

修了生の声 [認定登録 医業経営コンサルタント]

＜修了後の振り返り＞

そんなわけで願書提出に至ったわけであるが、今振り返れば、上記意思決定は強ち見当違いのものでもなかったように思われる。予想外の収穫は、COVID-19の影響によって、他校が休校になった期間であっても、自校はカリキュラム通りに実行する「対応能力」を産能大学大学院は内包していることを知った。大正時代からその歴史をもつ大学院にあって、リスクマネジメント能力にすぐれ、実践型の教室を標榜するところ、本学の理念を実証したことは、論理面・実践面を重視する授業と無縁のものではないと思う。「為せば成る」ことを大学院の授業運営の現場から学んだ訳である。

修了生の声 [認定登録 医業経営コンサルタント]



2022年度入学
森田 仁計 氏

＜入学動機＞

医業経営コンサルタントとして病院経営を支援する中で、近年特に組織に関する問題を抱えている病院が増えていることを日常的に感じていました。そういった病院に対しコンサルタントとして介入してきたのですが、より効果的かつ再現性の高いアプローチはないかと、日々模索していました。そのような状況の中で、メタステージでの西山先生の授業で紹介されたピーター・ドラッカーの「実践なき理論は空虚であり、理論なき実践は無謀である」という言葉が当時胸に刺さりました。この言葉がきっかけで、自身の業務における理論的基盤の不足を感じ、実践を裏打ちする理論を体系的に学ぶ場として、大学院への進学を決意しました。一般的な組織よりも特殊性の高い病院における組織マネジメントの問題に対して深い洞察を得て、より効果的な支援を目指したいと考えたからです。

＜実際に入学してみた感想＞

大学院では、実務で課題と感じていた組織に関する科目である組織変革や組織行動論などを中心に学び、ゼミでは修士論文を通じて病院組織における組織変革と組織学習をキーコンセプトとして研究を進めました。問題意識のある分野に対する理論的アプローチを通じて、根本的な解決策を探求することができ、その過程での苦労は多かったですが、同時に楽しさも感じました。特に、ゼミ仲間とのつながりは刺激的であり、卒業後も続いています。また、大学院の同期には病院の看護師や医療法人の事務局の方など、医療業界で活躍されている方々が複数いて、そういった実務者の方々と共に学ぶことができたのも貴重な経験でした。

卒業後もゼミの担当教授との関係は続いており、修士論文で十分に扱えなかったテーマの研究を継続しています。今後も医業経営コンサルタントとして、この継続的な研究（理論）と実務の行き来を通じて専門性を高め、医療機関の健全な経営に寄与していくことを目指しています。